

方向

第一六〇号 一九九三年一月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

十八人の王子たち — 法華経巡礼 八七一 — 1993 10 28 原田憲雄

07-07. さてまた、比丘たちよ、もっともすぐれた覚りの壇についたあの世尊（大通智勝如来）に、三十三天の神は高さ百千ヨージャナの大きな獅子座をもうけた。世尊はその上にすわり、無上の正しい覚りをさとした。またその世尊が覚りの壇にすわると同時に、ブラフマー神の眷属である天子たちは、覚りの壇のまわり百ヨージャナにわたって、天上の花の雨を降らし、また空中に風を吹かせ、朽ち衰えた花を吹き散らす。このように、降る花の雨を、覚りの壇のあの世尊に、絶え間なく降りそそぎ、十中劫の満ちるまで、世尊の上に降りそそいだ。このように、降りそそぐ花の雨を、あの世尊が完全に涅槃されるときまで降らせ、その世尊に、降りそそぐのである。また四天王の眷属の天子たちは、天神の太鼓を打ち鳴らし、無上の覚りの壇についたあの世尊を讃嘆し、そのすわっている世尊のために、たえまなく十中劫のあいだ鳴らしつづけ、そののちさらに、天神の樂器を鳴らしつづけた、あの世尊が大涅槃に入られるまで。

*tasya khalu punar bhiksavo bhagavato bodhi-maṇḍavarāgra-gatasya devais trāyastriṃśair mahā-si-
mhasānam (W. siṃh āsanam) prajñaptam abhūd yojana-gata-sahasra-samucchrayeṇa yatra sa bhagavan
nīśadyānūttarāṃ samyak-sambodhim abhisambuddhah / samanantara-nīśānasya ca khalu punas tasya*

bhagavato bodhi-maṇḍe aṭha brahma-kāyikā deva-putrā divyaṃ puṣpa-varṣam abhipravarsayāmāsur
 bodhi-maṇḍasya parisāmantakena yojana-śatam antarīkṣe ca vātān pramuñcanti ye taṃ jīrṇa-puṣpam
 avakarṣayanti / yathā (W. tathā) -pravarsitam ca tat-puṣpa-varṣam tasya bhagavato bodhimāṇḍe nis-
 āṇṣyāvuyuccinnam pravarsayanti paripūrṇaṃ dāsāntara-kalpāṃś taṃ bhagavantam abhiyavakiranti
 sma / tathā-pravarsitam ca tat-puṣpa-varṣam pravarsayanti yāvat parinirvāṇa-kāla-samaye tasya
 bhagavatas taṃ bhagavantam abhyavakiranti / cātumahārājakāyikāś ca deva-putrā divyaṃ deva-
 dundubhim abhipravādayāmāśuṣ tasya bhagavato bodhi-maṇḍa-varāgra-gatasya sat-kārātham avyucc-
 hinnam pravādayāmāśuḥ / (W.) paripūrṇaṃ dāsāntara-kalpāṃś tasya bhagavato nisāṇṣyā (W. /)
 tāta uttari tāni divyāni tūryāni satata-samītaṃ pravādayāmāsur yāvat tasya bhagavato mahā-par-
 nirvāṇa-kāla-samayāt //

07-08. さて、比丘たちよ、十中劫が過ぎたのち、世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚った人は、無
 上の正しい覺りをさとることができた。さすると同時に、そのことを知って、この世尊が太子であったと
 き、十六人の実子があり、その長男を智積といい、さてまた、比丘たちよ、十六人の王子たちは、ひとり
 びとりが、さまざまの、楽しく、目に美しい玩具を持っていたが、そのとき、比丘たちよ、その十六人の
 王子たちは、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚った人が、無上の正しい覺りをさとった
 ことを知って、玩具を捨て、涙をながす母や乳母にとり囲まれ、つきそわれ、また祖父の「大蔵」という

轉輪聖王、王の大臣たち、幾千万億という多数の人々にとり囲まれ、つきそわれて、その無上の覺りの壇についた世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覺った人に、近づいた。かれらはその世尊を恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、讚嘆し、崇拜するために近づき、近づくと、その世尊の両足を頭にいただいて敬礼し、その世尊を右まわりに三度めぐって合掌し、つぎの美しくふさわしい偈によって、世尊を見上げつつ、歌嘆した。

atha khalu bhiksavo dasānām antara-kalpānam atyayena sa bhagavān mahāvijñājanābhihūṣ tathag-
ato 'rhan samyak-sambuddho 'nuttarāṃ samyak-sambodhim abhisambuddhah / samanantarābhisambuddham
ca tam viditvā ye tasya bhagavataḥ kumāra-bhūtasya sodaśa putrā abhūvann aurasa jñānakaro nāma
tesaṃ jyesṭho 'bhūt / tesāṃ ca khalu punar bhiksavaḥ sodaśānāṃ rāja-kumārāṇāṃ ekaiḥkasya ca viv-
idhāni kriḍanakāni rāmaṇiyakāny abhūvan vicitrāṇi darāṇiyāni / atha khalu bhiksavas te sodaśa
rāja-kumārās tāni vividhāni kriḍanakāni rāmaṇiyakāni visarjayitvā tam bhagavantam mahābhijñā-
janābhihuvam tathāgatam arhantam samyak-sambuddham annutarāṃ samyak-sambodhim abhisambuddham
viditvā mātṛbhir dhātṛbhiś ca rudantṛbhiḥ parivṛtāḥ puras-kṛtās tena ca mahā-rājñā cakra-vart-
in 'āryakeṇa mahā-kośena rājāmātyaiś ca bahubhiś ca prāṇi-koṭī-nayuta-śata-sahasrairḥ parivṛtāḥ
puras-kṛtā yena bhagavān mahābhijñājanābhihūṣ tathāgato 'rhan samyak-sambuddho bodhi-maṇḍa-
varāgra-gatas tenopasamkrāmanti sma / tasya bhagavataḥ sat-kārāṛthāya guru-kārāṛthāya manāna-

'rthaya pūjanā 'rthārcanā 'rthāpācāyana 'rthāyopasamkrāntā upasamktamya tasya bhagavatāh pa-
dau śirobhīr vanditvā tam bhagavantam tris-pradakṣiṇī-kṛtyaṅjalim praśrīya tam bhagavantam
samukham ābhīr gāthābhīr sārūpyābhīr abhīstuvanti sma //

根源的な仏ともいふべき大通智勝如来は、出家する前に十六人の息子がいたという。この「十六」は、古代イ
ンドの通念では「完結」をあらわす数であって、それが仏教にもとりいれられたものらしい。仏教以外の思想や
宗教を「十六異計」といい「十六外道」というのは、完結する数によって一切の外教を分類したのである。心を
十六に分類して「十六心」といい、観法に十六行相を立て、地獄も十六に分け、菩薩や神や羅漢に「十六大菩薩」
「十六善神」「十六執金剛神」「十六羅漢」などをかぞえるのが、それである。もっとも上に挙げたこれら「十
六」のつく言葉は、おおむね文字經典としての『法華経』よりも後にできたものらしい。

さて、十六人の王子は、みな出家し、仏の説く法華経を聞き、これを信受し、やがて仏となることを大通智勝
如来から授記される。十六の仏と仏国土の名も後に示されるが、いまのわれわれに親しいのは「娑婆世界」の教
主の「釈迦牟尼仏」と「西方世界」の「阿弥陀仏」だけである。

地球というこの娑婆世界に住む人類が、大通智勝如来によって説き明かされた『法華経』を、釈尊から教えら
れる尊い因縁がここに示されるが、「西方世界」という、たぶん銀河系宇宙以外の世界の教主である阿弥陀仏も、
『法華経』を聞き、信じ、説くことによって仏となられたのは、たいへん意味ふかいことである。

※前号正誤 一七頁4行 演奏させこと↓演奏させること 七行 「醉牡丹」が↓「貴妃醉酒」の牡丹が

銅駝悲心
客飲孟中酒
駝悲千萬春
生世莫徒勞
風吹盤上燭
厭見桃林笑
銅駝夜來哭

山本のぶを刻（一九八六・一）

李賀 銅 駝 非 心 （下） 銅の駝駝が悲しむ

人びとは飲む さかずきの酒

駝駝は悲しむ 万年の春

この世に生まれて 苦勞は無駄

風吹きや消える 燭台の灯さ

見るのも嫌だ 桃の花らが笑うのは

銅の駝駝が 夜さり おいおい哭いている

「銅駝悲」の後半である。ただし、この詩は四句の三節からなっているので、「家」と「駝」、「人」と「春」、「燭」「哭」が、韻字である。

人間が人間らしい感情を失ったとき、人が無情と嘲り非情とそしる花や草、銅の仙人や駝駝が、人間にかわって悲しむ、というのが李賀の見出した世界だ。（一九八二・一〇八 原田憲雄）

十月十日の夜、広隆寺の牛祭が行なわれた。広隆寺は弥勒菩薩でよく知られた秦氏の寺である。垂古天皇十一年（六〇三）に建立された山城最古の寺で、秦河勝が聖徳太子から仏像を賜り、それを御本尊にして建立したのだそうである。この御本尊が現存する弥勒菩薩であることが記録にあり、秦氏は応神天皇の十六年に、大陸から日本に帰化した大きな氏族だという。

広隆寺は二度の火災で炎上したが、永万元年（一一六五）に再興され、現在も当時の講堂がそのまま残っている。丹塗りであったために、赤堂とも呼ばれ、この堂には大きな阿弥陀如来が坐っておられるが、よく整ったきびしいお顔をしていらっしゃるように思う。他に薬師堂、本堂、地藏堂、靈宝殿、桂宮院などがあり、平日は弥勒菩薩を拝観に来る人がたえないが静かな寺である。

牛祭は夜の八時頃から始まるというので、日が暮れて暗くなってから出かけた。バスの中には祭を見に行くような人の姿はなくて、休日なのに勤め帰りのような人ばかりであった。広隆寺前で降りたのもわたしのほかに一人だけで、寺の総門のあたりもひっそりしている。まちがったのかと思いついてみると、扉は開いていて、中は暗いけれど人が石段を上がって入って行く。とにかく門の中へ入ってみると、ずっと奥の本堂に光が見える。気がつくとすぐ左手の薬師堂の中にも電燈がついて、軒にもひとつそれほど明るくない外燈がついていた。そちらへ近づいてみると薬師堂の前の広場が大きく竹で囲われて、それに添って人がぐるっととりまいて立って

いるのだった。暗いので人の顔は見えないし、みんな静かにしているのであまり声も聞こえない。竹がこいの中を人の間からのぞいてみると、ふだんは何もないところに拝殿のような小さな舞台が置かれ、堂に向かってその左右に新らしいものが積んであった。新の山の上に鬼の面のように思えるものが二枚ほど乗っているが、暗いので、ほんとうにそうなのか、そのように見えるだけなのかわからない。人の後をまわって行くと、消火器の箱らしいものが立っている所だけがあいていた。そこへ入ってふと空を見ると、かすかな明りに照らされて、返り咲きの桜が咲いている。わたしがじっと見上げていると、近くで「これ桜かなあ」という声があった。気をつけてまわりの人を見ると、どうやら若い人ばかりのようであった。

どんなことでも待つというのには不思議な時間である。始まればそれが同時に終わりであることさえもあるのに、ひたすら待つことに気づいて驚く。待つ間を楽しむのが見物というものだろう。若い人たちは互いに顔は見えないが、時々ぼつりと話したり、笑ったりしながら、ただここにいることを楽しんでいるようである。囲いの中ではお堂と舞台を行ったり来たりして何か準備をしているらしい人がある。目が馴れてくると、お堂の前の囲いの中に折りたたみの椅子が並べてあるのが見える。みんな外に立っているのにあの椅子には誰が坐るのだろうかと思ったりする。囲いの中では何も始まる気配がない。こんなところにずっと立っていて、ほんとうに祭が見られるのだろうか。牛が神様を乗せてどこかを歩くようなことを聞いたが、何も無い囲いの中を見つめて立っているうちにどこかで何かが始まっているのかもしれない。

広隆寺の牛祭は、今宮神社のやすらい祭、鞍馬の火祭とともに京の三奇祭といわれている。どのような祭なの

だろうか。望月仏教大辞典によると、この牛祭は、長和元年（一〇二二）九月十一日に、恵心僧都源信が広隆寺で声明念仏を修されたところ、道場に仏法守護の摩吒羅神（まだらしん）が現れて「この法会、末世まで退転なくまもるべし」とおっしゃったので、十二日にこの神の祭を催された。祭文は恵心僧都が書かれたが、その内容は、神明の威風により年中の災禍をはらい、天下太平に、天皇は長寿を得たまい、民も安らかになるだろうというようなことだそうである。そして、

その祭文は奇怪な言辞を以てつづり、百鬼夜行の振舞を以て摩吒羅神を敬祭し、天下安穩、寺家安泰を祈り、更に悪病・讒言・いさかいより、堂塔の鳥、鼠の輩に至るまで、長く攘い退けん事を祈願せる義を述べたるものなり……

と書かれている。奇怪なる言辞というのはどういふ言葉だろうか、百鬼夜行の振舞を以て敬祭するというのもおもしろい。この祭は、もと摩吒羅神風流といったが、徳川時代に摩吒羅神祭礼となり、後に牛祭と言われるようになったらしい。江戸末期に一時廃止されていたのを明治二十年に富岡鉄斎がこれを復興して、十月十二日に行うことにした。現在十月十日に行われるのは体育の日の祝日にあわせたものだと思う。恵心僧都源信は『往生要集』などを著わした比叡山の高僧で寛仁元年（一〇一七）七十六歳で亡くなっている。なお年表の中から、よく知られている事柄をひろってみると、恵心僧都が三十七歳のころに空也上人が寂し、四十四歳の一月に師の良源僧正が寂し、その年の四月に『往生要集』ができあがる。六十歳のとし、清少納言の『枕草子』、翌年、和泉式部の『日記』、六十六歳のとし、紫式部の『源氏物語』がそれぞれできたとされる。藤原といえはわたしたち

の想像の中ではきらびやかに華やかな時代だけれど、じっさいは火災や洪水が多く、疱瘡なども流行して路頭に病者・死者があふれ、「祇園御霊会」（祇園祭）が九七五年に、今宮神社の「紫野御霊会」（やすらい祭）が一〇〇一年に行なわれている。このような時代に「牛祭」も行なわれたわけで、人々が無常を感じ、念仏を唱えて極楽往生を願った時代だと考えられる。

さて、いつまでこの暗がりの中の祭のセットを囲んで立っていればよいのだろうか。奇祭のひとつ、やすらい祭は昼間だけれど、これも見物の人々は今宮神社の境内で、縄で仕切られた四角い広場を囲んで、白い砂を見つめながらじっと待っている。やすらい鬼は町の家々の前で鉦をたたいて踊っているのだけれど、長い時間をみんな境内で待っているのである。摩訶羅神も今、どこかを歩いておられるのかもしれない。

わたしはそこを離れて、奥の灯のついている本堂のほうへ歩いて行った。暗いので足もとがおぼつかなくて、つまづきそうになりながら歩いて行くと、木の下に能舞台のような建物があって、ふだんは閉じられているところだが、戸が開いて、うすぐらい電燈がついている。

そこで女の人たちが紙で作ったお面とお守りを買っていた。赤鬼、緑鬼と、今夜の主神である摩訶羅神のお面である。それほど数が多くないから売り切れたらおしまいなのだろう。鬼の顔はよく見るものと変わりはないが、摩訶羅神のお顔はまっ白で、黒髪を中央でびたっと分け、額の中央に左右にくるっと巻いた短い髪を垂らしている。そのすぐ下に眉毛が豆粒のように丸く二つあり、目は切れ長のするどい二重まぶた、人なら白いところが金色、黒目のところは白で、ひとみに黒い点が打ってある。鼻は別の紙で作られていて高く突き出ている。一文字

に結んだ真紅の唇。ふつうの耳が両側にひらっとついている。ちょうど五条大橋で弁慶とわたりあった牛若丸を、目を大きくしてその両眼がくつきそうに近く、いっばいに見開いた感じである。摩訶羅神は若々しく美しいが少し異様なお顔をなさっている。

本堂のほうへ行ってみると、そこにも暗い中にたくさんの人が立っていた。本堂の中は明りがつき、鉦をたたいている人と踊るように拍子をとって足をひょいと上げてトンと太鼓を打っている人がある。ふつうの小さい和太鼓のようである。人の中に立っていると、大きな提灯を棒の先にかかげた人が、西の門、東の門、南の総門からだんだんと集まってきて、本堂の前に並びはじめた。人の整理にあたっている消防団の人が、「牛祭は提灯祭とも言います。あれは高張提灯といいますが、各町内から一つずつそれぞれに持ってきます」と話していた。七十センチ四方くらいの箱形の提灯と、長丸の大きな提灯を二つ組み合わせたものの二種類があり、どれにも摩訶羅神、五穀豊穰、家内安全と書かれ、町名が書いてある。西門へ行列が出るので、そちらに立っていたほうがよく見えると聞いて、行ってみると人垣でいっぱいだった。すき間をさがして、また暗闇の中で待つことになった。いろいろな話し声が聞こえる。

「あれなんと書いてあるの？ 魔の下は叱るといふ字みたいね、ああちがう、上にノがある、魔なんとか神」という声は他の土地から来た人だろうし、

「長い長いこと祭文を読まはるやろ、去年なんて、いっぺん家へ帰ってもういっぺん来たらまだ読んであったわ。長い長いなあ。なんやお経みたいなのわからへんことを」

とすぐ傍で話している人があったので、「行列はこの前を通って門の外へ行かはるんですか」とたずねると、「そうです。ここを通って西の門から出て、お寺のまわりをずうっと行列して、東の門から入らはるんです。

向こうに舞台みたいなのがありましたやろ、あそこでまだらしんが祭文を読まはるんです。ここで行列を見たら、あっちへ行かはったらよろしいわ」と教えてもらった。

「ああへまだらしん」だって。祭文が長いって言うから、その間に食事に行きましようか」

「食事だって？ どこかにそんな所があったかなあ」

「あったわよ。それよりお祭が終わるのは夜中になるって言うけど、そんなに遅くまで駐車場、大丈夫かしらね」

遠くから自動車で来た人らしいと思って聞いていた。八時近くなると、街の人が見物に出かけてきたらしく、行列の通る参道に沿ってロープが張られて、その外側に観客が並んでいるのに気づかないのか、参道をそろそろ歩いてくる。地もとの人達には、自分たちの祭というような気分があって何気ないのだろうけれど、奇祭などと言われるので、遠くからも観光客が集まっているのである。消防団の人に言われて仕方なく参道を退いて、ロープが張っているのと反対の側に地もとの人達が立ち始めた。こちら側にいた人も後のほうの人が向かい側へ渡ったので、たちまち参道の両側が人でいっぱいになった。

わたしの立っているところから少し右のほうで、道は鉤の手に曲がっていて、向かい側には植え込みがあるので見えないが、その奥のほうから行列が出てくるらしい。高張提灯が、総門のほうへ出たり入ったりしていると

思ったら、地もとの人が、

「ほらまた牛を迎えに行かはるで、もう三べんめやな」という。

「牛はどこか別の所にいるんですか」とたずねると、

「はあ、牛は別の家にいるんです。牛方さんやらみんなそこでごっつおう食べてお酒を飲んではりますにゃわ。いっぺんぐらい迎えに行かはったかて、まだまだて言うて、なかなか立たはらへんのです。提灯を持った人が三べん迎えに行かはることになってますにゃ。三べん行かはるとやっつと、よっころしょと立って出て来はるんですわ」

奥のほうでパチパチと音がして火が燃え出したらしく、そちらが赤く見えた。

「火がついたやろ、牛が来はったらしいな、去年の牛は元気でさっさと行かはったけどなあ」

八時を過ぎても、火の燃える音ばかりして牛は出てこない。ずいぶん待ったような気がした。ようやく出る気がして、消防団の人が「牛にカメラのフラッシュを向けんといてください。牛がびっくりしてあばれますから」と言った。見物の人達はみんな少し心配になった。女の人が、

「牛に向けてフラッシュをたいたら駄目だって。牛がびっくりして暴れるってよ、ほら、もっと大きな声でみんなに言わなくちゃ駄目じゃない」

と繰り返して言っている。闇の中だから、みんな心配になるのだろう。

「どうしてこのお祭は夜なの？ どうして夜にするの」

「夜やなかったらこの祭はねうちないやんか、この祭を昼にしてどうすんの、夜やさかいええにゃんかなあ」
互いに顔が見えないから声だけが飛び交っている。

やっと行列が動き出した。提灯がそろそろと出て行く。行列の人に向かって「ごころうさん」と声をかけている人がある。提灯がみんな出て、あかあかと松明をかけた人が出てきた。先に子どもが鉦と太鼓で音頭をとっている。まっ黒につやつやした牛が鼻をとられて出てきた。その牛の背に白い狩衣を着て大きな面をつけ、火に照らされて銀色に輝く帽子を高々とかぶった摩訶羅神が、ひときわ明るく陽気に見えた。何と言ったらいいのか、譬えような不思議な光景である。行列はゆっくりと西の門から出て南へとまわって行った。もう一度、先ほどの薬師堂の前へあたふたと戻ってみると、先に竹囲いに沿って並んでいた人は、前の倍ぐらいに増えて、びっしりと人垣ができていた。もう入り込む隙はない。背伸びをしてのぞいてみると、中の椅子席に、どういう人達なのかそろそろと入って坐りだした。薬師堂の前の階段は板が乗せられて坂になっている。その中央に広隆寺の貫主さんが椅子を出して坐っておられる。また待つこと三十分あまり。東の門のほうに気配がして神様が帰ってこられたらしい。舞台の両脇の薪の山に火がつけられて、あたりが少し明るくなった。しばらくして提灯の行列が竹囲いの中に入ってきた。鉦や太鼓の人が入ってきて、松明の人が来る。燃えて崩れ落ちそうになっている松明を前に差し出すようにして帰ってきた人もある。燃え残りの松明を焚火の中へ入れている。竹のはせる音がする。牛に乗った摩訶羅神はそのまま舞台のまわりを三度まわる。その間に鬼の面を付けた四天王が舞台に並んだ。牛から降りた摩訶羅神も舞台上に上がった。長い時間、牛の背にいてお尻が痛かっただろうと思ったが、降りると

さっさと歩いて行かれたので感心した。三宝を持った人がまず四天王に何か渡し、もう一度、三宝をささげて摩訶羅神に祭文を渡す。それを開いて摩訶羅神が祭文を読み始めた。声はまったく聞こえない。祭文の始めのほうは雅語真理で、終りは俚言戯語になり、観衆は笑ったり野次ったりすると辞典にあり、恵心僧都の祭文に後の人がつけ足したのかもしれないと書かれている。

「よう見てんと、今、何やら読んで思ったと思たらもういはらしませんで、そら早いこと、ちょっと目をはなしたら、その隙にもういはらしません。あのお堂の中へ、たあっと走って飛び込まはりますのや。……そうどすなあ、それはもう夜なかになることもありませんなあ」

みんな夜なかまでここに立っているのだろうか、もう十時近いがバスはまだあるだろうか。少し気になり出したが、摩訶羅神がお堂の中へ駆け込むまで見ていたような気もするし、どうしようかと考えていた。思い切って帰ることにして人垣を抜けて歩き出したら、闇の中で、「もうあきらめたか？」と誰かの声があった。あきらめた人が他にもぼつぼつと帰って行く。門の外で近くへ帰るらしい人に、京都バスはまだありますかとたずねたら、まだあるはずだとの返答で、停留所へ行ったが、暗くて時刻表が見えない。他に待っている人があったので、何となく立っていると、若いひとが来て時刻表を見る。「見えますか、次の京都バスは何時ですか」とたずねたら、そのひとは腕時計を見て「もうありませんね」と言った。「ああ、もう無いのですか、そんならわたし電車にしますわ」と歩き出した。若いひとと同じ方向へ歩く。バス停は総門から西、電車の停留所は東にある。四条大宮から嵐山までを結んでいる嵐電に乗って、四条大宮に着いた。ちょうど最終の市バスが待っていてくれて、わた

しが乗るとすぐ動き出した。ほっとして座席に掛けると、呆然としたなかに妙な興奮が残っている。近くで炎に照らし出された白い姿を一瞬見ただけだったが、摩訶羅神とはどういう神様なのだろうかとしきりに気になった。牛祭のことや秦氏のことについて、京都女子大学の高橋達明氏がくわしく書いておられるのを拝見したことがあるけれど、今、それを見いだせない。これも仏教辞典によると、摩訶羅神は常行三昧堂の守護神、また玄旨帰命壇の本尊であるという。要するに、念仏者の守護神で極楽浄土に送ってくださる神様だという。

…臨終せんと欲する時、我れ彼の所に行きて肝屍を食うが故に臨終正念を得。若し我れ肝を食はざれば正念を得ず、往生を遂げずと云ふ。…

とある。「食ふ」という表現は氣味が悪いけれど、臨終の時に、さまざまな執着や迷いを断切ってすっきりと往生させてくださるといふことだろうか。死といふことは、経験者にたずねることができないものだから、誰からも教えられず、どんな人も自分でするより仕方のないものである。誰しもいずれは死ぬと考へている間は恐ろしくないが、病氣などで死を宣告された人の氣持はどんなものだろうか。

「死ぬことに失敗した人はありません、誰でも死ぬるんです。安心して死にましようよ」

とわたしに言ってくれた人があった。その人には摩訶羅神は關係ないかもしれないが、その人が、もし「南無阿弥陀仏」と唱えたとしたら、ちゃんと摩訶羅神がその人をも極楽へ往生させてくださるに違いない。

摩訶羅神は中国から渡来された神で、第三代天台座主、慈覺大師円仁が唐から帰る船の上でこの神が示現され、比叡山の常行堂に勧請されたという。それから百五十年ほど後、秦氏の寺である広隆寺で恵心僧都源信が声明念

仏を始めるときに常行堂に神像を安置したということである。牛は神仏のお遣いとされることが多く、大切にされるし、たいていの農家に飼われていたから祭に参加することはわかるが、提灯が各町内から出てくるというのはどうなのだろう。別の村祭がいっしょになったのかも知れない。恵心僧都が行なわれた祭の形は長い年月の間に変ってきたはずだし、これからも変って行くのが自然だと思う。しかし、他の祭にはその意味を忘れて、ただのおまつりさわぎになっているものもある。祭の心だけは忘れないように、せめて現在の牛祭ほどの静けさを保つことができたらいいのにと思う。

蝉

1993 08 14

原 田

慶

墓地に一本のローソクが

燃えていた

音もたてずに雨が降り

木々は暗く

炎は不透明な温かい光で

あたりをつつんでいた

雨が強くなって炎は

かたむきながら伸びあがる

気がつくとは蝉が

鳴いていた

こんな冷たい夏も

彼らには

ひとつしかないこの世の季節だから

何のたくらみもなさそうに

無造作に鳴いている

蝉は頑丈なからだを

細い足で支え

たいていはひっそりしているが

だれかが鳴き出すとそろって

唱和する

彼らのからだは無器用で

振り向いて微笑み交すようにはできていない

ふとしたはずみでぼとりと落ちると

地に背をこすりつけてくるくるまわり

足をかすかに動かして

それからほんとうに心地よさそうに

うっとりとして眠りにつき

夢を見ながら干からびてゆく

墓地のローソクが

燃えつきて

白い煙がひとすじゆれた

あめは小やみになり

蝉はまだ

こともなげに鳴いている

1993 09 18 原 田 慶

戸の外に

熊がいるので

どうしようかと思っていたら

まわりの竹ヤブが

拍手を始めた

ごうごうとみんなが拍手をするので

熊はしきりに照れていた

わたしもたぶん

熊がこわかったので

ずっと手をたたきつづけた

そのうち寒くなって

目が覚めた

昨日の昼間にテレビを見ていたら

岩手大学の学生が

コンナモノニワタシハナリタイ

という演説をした

その中のひとりが

品種改良をして

寒さの夏にも強いイネを作りたい

と言った

宮澤賢治の夢はまだ続いているのだった

眠れなくなったので起きて

電燈をつけると

玄関の花生けの赤い花が

しおれていた

庭の夾竹桃の根もとに

いつも枯れた花を捨てるけれど

月下美人

その花のためにたった一度も

南無妙法蓮華經

ととなえたことがなかったなあと思った

時計を見たら午前三時だった

1993 10 13

原

田

慶

今年さいごのひとつが咲きます

夏から三度 二十二もの花を咲かせました

夕七時 花びらをほどこきはじめましたが

月はどこにいますのしょう

雲は白く煙のように南へ行き

星が流れをさかのぼって

ぐんぐんと泳いで来ます

風呂屋の煙突が物語のように

美しく見えるのは

雨ばかりの冷たい夏が過ぎて

季節が移ったからでしょう

气象台の予報によれば

今夜は月齢二七・〇 月の出は午前三時六分

花はたぶん月を待って

明け方まで咲きます

「実を結ぶこともないのにどうして

花をつけるのでしょうか」

と言ったら

「生命の花だ きっと

いのちの美しさを咲かせているのだ」

と近くで答えてくれました

月下美人はたぶん

白い花をふるわせて

明け方近く昇ってくる細い月に

ことし最後の挨拶をするのでしよう

また出会えるでしょうか

月と花とあなたとわたしと

劉

麗

(中国の詩人と仏教 三四)

1932 14

原田憲雄

工藤美代子氏の「寂しい声」(『ちくま』二七一号)を読んでいたら、西脇順三郎の次の文を引いています。

詩人という意味は偉大な詩とそうでない詩の区別がわかる人だと思ふ。あなたは詩人だと思ふ。詩を書かない人でも、偉大でない詩を書く人も、もしその区別がわかるなら、はじめてその人が本当の詩人だ。偉大な詩とそうでない詩の区別がわかる人必ずしも偉大な詩が書けない。詩人は偉大な詩が書けなくとも、また全然詩を書かなくとも、その区別がわかる人は偉大な詩人だと思ふ。あなたはどうもそういう偉大な詩人にぞくする男だ。エリオットもそういう詩人だと思ふ。

エズラ・パウンドは、一九五六年に西脇の英詩「January in Kyoto」を読んで感銘を受け、ノーベル賞候補と

してスエーデン・アカデミーに推薦しました。受賞は実現しなかったが、その後、西脇がパウンドに宛てる手紙の形で書いたパウンド論の一節だそうです。

そのような事情はとにかく、詩を書く人を詩人と呼ぶ常識を超えた論旨がおもしろく、そうして、それならパウンドやエリオットよりこの言葉にふさわしい「偉大な詩人」が中国にいたではないか、というのが、わたしがこの言葉を孫引きするゆえん。その詩人がここに取り上げる劉勰（りゅうきょう）なのです。

劉勰は、生卒年もはっきりしないのですが、五世紀の人で、貧しい家に生まれ、齊・梁兩朝にわたって高僧として知られた僧祐に養育され、その師の『出三蔵記集』の編集を手伝いながら儒・仏・道の三教を学んでいずれにも精通し、『文心雕龍』という文芸評論の書を著わし、当時の文豪の沈約に見いだされ、梁の武帝に仕えてその宗教政策に寄与し、僧祐の死後、武帝に暇を請い、出家し、まもなく死んだ、といわれています。

戦前はさほど問題にされませんでした。今日では、中国の文芸批評の書としては、最古の、そして最も体系的なすぐれたものとして評価が確定し、これを疑う人はありません。そうしてその批評の根底に、かれが師から学んだ仏教の分類学や批判論のあったろうことも、すでに多くの人によって指摘されていて、興膳宏氏の「文心雕龍と出三蔵記集」はその一つです。かれについての詳細はそれらにゆずりましょう。

劉勰には残された詩は一首もありません。人と詩を唱和したという伝えもないようです。しかし、偉大な詩を判別し、思想の卓越と卑俗を見分けえた人でした。パウンドやエリオットもそうした人ですが、歌わぬ詩人という点では、西脇のいう「偉大な詩人」とよぶに、いっそうふさわしい人物といえるではありませんか。